

「日本装身具史」をめぐって

(1)

ジュエリーの起源と着用動機の変遷など



日本宝飾クラフト学院の理事長・露木宏氏は、3月15日に美術出版社から「日本装身具史——ジュエリーとアクセサリーの歩み」を出版。「これまでなかったジュエリーの本」、「日本のジュエリーの歴史がやっと分かつた」と反響を呼んでいる。

この書にいち早く注目したジュエラーズグループ「有朋ソサエティー」では、5月23日に露木氏を講師に「日本装身具史をめぐって」と題して講演会を開催した。質問者は同ソサエティーの世話役の一人で、「ジュエリー言語学」(柏書店松原刊)などの著作、本誌「MOMOZAWA FILE」でおなじみの桃沢敏幸氏。

大変に興味深い話が出たので、本誌でその様子を採録すると同時に、その時、時間の関係で打ち切りになったテーマについても続けて話をしていただいた。その内容を二回に分けて紹介する。

執筆意図、本の成り立ち

桃沢●講演会は好きじゃないという露木氏のご要望で、私が質問を用意し、それに対して露木氏が答える形で、この講演会を進めることになります。最初の質問です。露木さんはなぜこの時期に日本のジュエリーの歴史書をまとめたのでしょうか。その執筆意図は?

露木●ジュエリーの歴史への興味や疑問は私がこの世界に入って以来、ずっと持ち続けてきたものです。

20年前から、日本のジュエリーやアクセサリーに関する本や資料を集め、その数もかなりの量になったので、一区切りをつける意味でも、インプットしてきた情報をまとめておきたいと思ったのが直接の動機です。

古代から現代までを一人でカバーするのは難しいので、旧石器時代から古墳時代は考古学が専門の井上洋一さん(東京国立博物館)、明治時代から現代をヨーロッパジュエリー史に造詣が深く、庭園美術館で「指輪」展などを手懸けた閑昭郎さん(現在は東京都現代美術館)に担当していただきました。お

二人とは以前から学習会や展覧会企画などを通じて交流のある、いわば学友で、この本をまとめるにあたり両氏の果たした役割は大きかったと思います。おかげで私は飛鳥・奈良時代以降から江戸時代の中世・近世に集中できました。

日本のジュエリー・アクセサリー(この本では両者を「装身具」という言葉でくくった)について少し勉強した方ならお分かりだと思うのですが、それについて触れたどの本や書き物を見ても、古代に盛んだった日本の装身具文化は飛鳥・奈良時代を最後にブツリとあるいは忽然と消え、その後復活するのは明治時代になってから、という論調なんですね。

これまでの日本装身具史観

消えた装身具

露木●お手元にこれまでの日本の装身具歴史観について、代表的な見解をまとめた資料をお渡ししてあるのでご覧ください(次頁資料参照)。

まず野間清六「装身具」(日本の美術

NO.1)。今日のいわゆる「消えた装身具」という歴史観を決定的にしたのが1966年(昭和41年)に出たこの本です。そこにはこう書いてあります。古墳時代には、装身具は盛んであった、そのことは遺品や、埴輪に見られる装身具の使用からよく分かる。「ところがそうした装身具の使用は、その後どのようになったか」というと、それは砂漠の中に消えていった川のように、その姿を見せなくなる。なんとも不思議なことである。」(下線は露木)と書いています。

これ以降、1967年の菱田安彦「宝石デザイン」、1974年の「おんなの服飾史」(読売新聞社)、1993年岩波新書「考古学の散歩道」、春成秀爾「古代の装い」などが出来ます。これらのどの本を見ても中世以降の装身具には否定的で「世界的には異常ともいべき装身具の欠如の状況」(「考古学の散歩道」)、「世界でも珍しいアクセサリーのない時代が1,100年間続きます」(「古代の装い」といった書かれ方をしています。こういった説の延長線上に書かれたのが、近年話題になった浜本隆志著「謎解きア

資料

これまでの日本の装身具についての歴史観 下線=露木



話をする露木宏氏と質問者の桃沢敏幸氏

クセサリーが消えた日本史」(光文社新書)です。

一般読者へジュエリー・アクセサリーへの興味を持たせてくれたという点では功績大なのですが、内容的には分かりづらいところが多い。「消えた装身具」の視点から書かれているからだと思います。

定説への違和感、疑問

露木●私はこれらの定説にずっと違和感をもっていました。その違和感は最初のうちは、人間はそんなに簡単に変われるんじゃない。生活に染みこんだ装身具の習慣が突然のように消えるというようなことは考えにくい、という素朴なものだったので、だんだん資料調べていくうちに、装身具が消えてしまったとはどうしても思えなくなってきた。これまでの装身具史観は日本の装身具の一面しか見ていないのではないかと思うようになってきました。

たしかに、様々な理由によって飛鳥時代には一時、装身具の文化は中断しました。しかし、それはこれまでいわれているように1,000年とかいう単位ではなく、その10分の1の100年程度です。奈良時代になると、髪の飾りと腰の飾りが中心となりますが、装身具の習慣は復活します。そのことを資料的な裏付けをして提示しました。

桃沢●「約100年の装身具空白期」の項目の部分は、露木理論が色濃く出てい

「古墳時代において、装身具が盛んに用いられたことは、今日残っている当時の遺品や、また埴輪に見られる装身具の使用からよく知られるところである。ところがそうした装身具の使用は、その後どのようになったか」と、それは砂漠の中に消えていった川のように、その姿を見せなくななる。なんとも不思議なことである。」

野間清六「装身具」(日本の美術No.1)

1966年 至文堂

「私たち日本人は、この千数百年間、ヨーロッパ的意味でのジュエリーをほとんど使っておりません。しかし古事記に出て来る三種の神器のひとつ八咫鏡(やさかに)の勾玉は、いわばネックレスですし、いわゆる古墳時代と呼ばれる四・五世纪あたりでは、日本人もふんだんに、めのうやひすいなどの色石を使った華麗なネックレスを飾り、粒金の豪華なドロップ式のイヤリングや、ブローナズ、色石、貝殻などのブレスレットを身につけていました。ただ指輪があまり愛好されなかっただけは、今日の指輪の流行に比べ面白いことですが、こうした華やかなジュエリーが次の平安朝に入って全く消えてしまうのはなぜでしょうか。」

菱田安彦「原色 宝石デザイン」

1967年 社会思想社

「古墳時代(三~七世紀)に、あれほど多種多彩化したアクセサリーが、飛鳥・奈良時代になると、ぶつり妻を消してしまった。高松塚古墳は、古墳時代終末期のものと推定されているが、豪華な副葬品ではなく、壁画の婦人たちも、アクセサリーを全くつけていない。どうしてだろうか。」

『衣服令によって、上から下まで細かく規定したから、だれもが好き勝手にアクセサリーをつけられなくなつたのだろう。しかも、中国風の華麗な衣服に変わつたので、前時代のアクセサリーは似合わないばかりか、不必要になつたのではないか』と、京都大学講師・小林行雄さん(考古学)は推理する。これは、日本の服飾史上における一つの革命といえるかもしれない。』

読売新聞大阪本社婦人部編「おんなの服飾史」

1974年 読売新聞社

「前代に、これほどもてはやされた首飾り、耳飾り、腕飾り、髪飾りの類が、平安期にはいると、まるで突然変異でも起こしたように、日本人の身辺から消えてしまうのだ。そしてこの状態は、鎌倉、室町、戦国、江戸期をへて幕末までつづき、明治の欧風流入でやつとまた、新しく外来的の装飾品として、ネックレスやイヤリングが日本の女をよそいはじめるのである。」

「ピタッと奈良朝末、平安初期という時点で、日本人がアクセサリー類と決別したのはなぜか。たとえば玉造部(たまつくりべ)の叛乱、廢帝(おうさつ)。ガラス工の集団が疫病に襲われたための技術伝承の断絶といったミステリアスな空想までたのしめるのだが、この謎を服飾関係の学者にうかがっても、答えはいつも得られない。謎は、やはり謎のままなのである。」

杉本苑子「片方の耳飾り」

1983年 中央公論社(中公文庫)

「世界的には珍しい、いや、世界的には異常ともいべき装身具の欠如の状況が日本では七世紀後半のころからはじまり、近世はじめのキリスト教導入期における十字架の着用のような特殊な例外はあるにせよ、1000年以上継続したのだ。」

田中琢・佐原真「考古学の散歩道」

1993年 岩波書店(岩波新書)

「七世紀になると、聖德太子は位を一二に分けて、紫・青・赤・黄・白・黒の濃淡の冠帽を授けました。これによって、統一的な基準もとづく身分制が成立しました。さまざまなアクセサリーを身につけることによって、身分・地位を任意にあらわしていた時代は、過ぎました。以後、耳飾り・首飾り・腕飾りなどをつけない、世界でも珍しいアクセサリーのない時代が1100年間つづきます。」

「日本列島のアクセサリーは、古墳時代の終末、七世紀の終わりごろには、その歴史をいったん閉じ、長い間、かけをひそめることになります。世界のアクセサリーの歴史でも例がないことです。」

春成秀爾「古代の装い」(歴史発掘④)

1997年 講談社

ると思います。空白のパックに次のようなものがあるとこの本では言っています。

①護符としての装身具が仏教伝来(552)により意識が変わった、②ジュエリーに不向きな服装の変化(605)、③ジュエリーを否定した冠位十二階(603)による、④「薄葬令」(646)の奢侈禁止による、⑤先進国の隋・唐の慣習の影響——これらについて、あらためてポイントを解説していただけませんか。

露木●実は①から④までの説はこれまでにも、先程紹介した本などで既に言われていることで、私のオリジナリティといえば、これまで幾分雑駁に語られてきた論点を整理した程度です。

それよりも注目してほしいのは、⑤の先進国の隋・唐の影響に触れた箇所です。ヒスイの勾玉や金銅製の冠は①～④の理由で説明できるのですが、古墳時代に農民にまで行き渡っていたという金環、すなわち金張りなどの耳飾りは、それだけではなくなった理由をうまく説明できなかったのです。この本とは別の興味で東アジアの装身具について調べていた時に中国では古くはその習慣があったが、隋・唐の時代には蛮風として嫌ったということを知りました。当時の日本と中国の関係を考えれば、中国に野蛮な国と思われたくないという一心から耳飾りを捨てたたいうことも十分ありえるのではないかと考えて書きました。まだ検証が不十分ですが、耳飾りがなぜ用いられなくなったかという説明には有力な仮説なのでは、とちょっと自信を持っています。

身を装い飾る文化とは

桃沢●ところで、原点に戻って、「はじめに」の冒頭で「ジュエリーの起源」について触れられていますが、大切な点だと思うのですが、これについてもう少し詳しく解説してください。

露木●お察しの通り、ジュエリーの起源について考えていくことは、ジュエ

リーの現実と一見無関係に思えて、根っここの部分では現代のジュエリー文化、さらには将来のジュエリー文化に連なる根本的な問題であると思っています。

ジュエリーの起源を考える前提として、人間の装い・飾る文化にはどんなものがあり、その中で装身具はどんな位置にあるのかということから話させていただきます。

本の中では装身具を「飾る文化」と規定し、人間だけが持っている固有の文化としました。装身具は「飾る」、そしてもう少し広く「装う」という文化の重要な柱です。人間の基本的な営みを「衣・食・住」という言い方がありますが、私はこの言葉には不備があり、人間の装いや飾りという重要な文化を、ないがしろにした言い方ではないかと思っています。衣だけではなく装身具も含んだ言い方にしてもいいですね。「衣」と「装身具」を含む言葉としては装い、すなわち「装」という言葉が考えられるので、衣に変えて「装」という文字を入れた「装・食・住」はいかがと思っています。

ちょっと理屈っぽくなりますが、お聞きください。身を装い飾る文化、すなわち「身体装飾」は大きく二つに分けることができると、私は考えています。

一つは「直接的身体装飾」。これは入れ墨、化粧などで肌に直接施す装飾です。結髪もこれに含まれるでしょう。今流行しているネールアートなどもここに入ります。

もう一つの身体装飾のジャンルは「間接的身体装飾」です。体に羽織ったり、付けたりする装飾です。最もよく知られる間接的身体装飾品は衣服とここでテーマにしている装身具です。本の中でも、装身具に類するものとして取り上げた装飾的携帯品もこの中に入れることができるでしょう。また、今回は除外しましたが、装飾的履物を取り上げようと思えばここに入ります。

堅苦しく思われるかもしれません

が、ジュエリーの起源を考えるためにには、こうした身を装い飾る文化の分類・整理が必要です。そうしないと、いたずらに問題を複雑にしななかな装身具の起源の核心に迫ることができません。

桃沢●身体装飾を直接的身体装飾と間接的身体装飾の二つに分けることの意味をもう少しお話ください。

露木●装身具の原点を考える時には、いわゆる装身具だけを見てても装身具の本質は見えにくいということです。装い飾る文化全体の中に装身具を位置づけて、その中で装身具を考える必要があるということです。

例えば、日本の装身具の変遷の中では、常に衣服とのせめきあいが問題になります。飛鳥時代には新しく導入された朝鮮半島風の衣服の影響もあって一時装身具が途絶え、また、平安時代には十二单のような装飾的衣裳が登場したため、一部を除いて装身具を付ける機会が減りました。

この現象なども、衣服と装身具が別のカテゴリーのものと考えると分かりづくなり、説明もややこしくなります。しかし、衣服と装身具は、体全体に羽織る(衣服)と、体の部分に付ける(装身具)という違いはあっても、身を飾るという着用動機においては同じです。ですから衣服の変化や発達によって装身具が一時後退したとしてもさほど不思議なことではないわけです。

装身具着用の最初の動機、目的

露木●さて、お尋ねのジュエリーの起源ですが、ここでは本に沿って装身具(ジュエリー・アクセサリー)の起源とさせていただきます。人間が装身具を最初に身に付けたプリミティブな動機、目的は二つあると思います。

一つは「自分を美しく飾りたい」という装飾欲求、すなわち原始的美意識から。もう一つは「魔よけや福を招くため」というお守り意識から」だと思います。

日本の場合で言いますと、原始的美

意識を動機とする説は、既に旧石器時代から始まっていると見てよいでしょう。本書で言いますと、旧石器時代のところで最初に紹介している北海道の湯の里遺跡から出土したコハクやカンラン岩で作られたペンダント状のものや、玉類がそれです。1万年以上の時を超えて現代の我々にも通じるような旧石器人の美意識にはただただ驚きです。ジュエリーの進歩とは何なのだろうかと思わず考えさせられてしまいます。

もう少し説明しますと、コハクやカンラン岩は、当然のことですが、木の実のように食べられるわけではないし、火打ち石のように火を起こせるものでもないでしょう。すると、なぜこれらを身に付けたかというと、その美しさに価値を見い出したしか考えられません。その美しさに畏敬の念を抱き、身に付けることによって自分を美しく飾ったのが装身具の始まりであったと思います。

さらに言えば、美しく感じることに価値を見い出すということは、生活の中に喜びを加えようとする活動であり、他の動物には見られない人間の文化の始まりとも言えます。

もう一方の装身具お守り説は、呪術起源説とも言われ、定説化しているのでご存知の方も多いと思います。動物の牙を模したといわれるヒスイの勾玉がその代表です。ヒスイの勾玉が用いられ始めたのは縄文時代の後期からで弥生・古墳時代になると盛んになりました。ヒスイは無尽蔵に採れるわけでもなく、あの形にするには大変な時間と労力が必要です。当時でも非常に貴重な宝石で、古代人のあこがれの宝石だったと言ってもいいでしょう。

ただ、私はヒスイの勾玉の呪術性は認めるものの、呪術的意味合いのみを強調しすぎるはどうかと思っています。やはり、ヒスイの勾玉の美しさ、すなわちその色、光沢、硬さ、そしてふっくらしたコンマ形の特有の形に古代人

が魅了されたのだろうと推察しています。

古代の人にとって「美」と「呪」は、今日のように明確に分けられるものではないと考えられます。美しいものにはマジカルな力が宿り、マジカルなものとはすなわち美しいものだというように、「美」と「呪」は渾然一体であったと思うのです。だからこそヒスイの勾玉は人々を魅了したのだと思います。

古代から近世までの装身具着用動機

桃沢●そのように始まったジュエリーの目的や着用の動機やその方法は、時代によってどのように変化したのでしょうか？

露木●こう考えています。装身具の二つの着用動機、自分を美しく飾りたいという装飾欲求と、魔よけ・招福のため身に付けるという動機は、その後もずっと残り、形を変えながら、あるいは時代によってはほとんど強調されないこともありますが、連綿と現代にまで引き継がれていると思います。その意味ではこれら二つの始原的着用動機は、装身具が装身具であるための基本的要素と言ってもいいかもしれません。

次に古墳時代以降に始まる着用動機について述べます。古墳時代は、強大な権力を持った人物が登場した時代で、その権力を反映したのが彼らの墓である「古墳」です。生前の彼らが好んだのは他を圧倒するような金色の冠や帶などの豪華な装身具です。これはそれ以前の時代にはなかったもので、古墳時代は「富と権力の象徴として」の装身具が始まった時代といえます。

「身分や地位の象徴として」の装身具という装身具着用の動機が一番色濃く出たのは奈良・平安時代です。これは当時の中国にならったもので、律令制下の衣服や装身具は、第一義的にはすべて身分や地位を表すものとして用いられました。

そして、これは現代にも通じる装身

具着用の動機なのですが、「おしゃれ、あるいは美意識の表現として」装身具を身に付けるという近代的あるいは現代的装身具觀は、意外に早くすでに江戸時代に始まっています（「お洒落」という言葉も江戸時代から）。

江戸時代の女性の髪飾り類を中心とする女性の装身具をつぶさに見ると、また当時の文献などを読むと、自分を美しく飾りたいという始原的な欲求がほぼすべてで（お守り意識の装身具も一部ある）、権力の象徴とか、身分・地位の象徴という意識とは、まったく違うところで様々な髪飾りを自由に楽しんでいます。ただ男性の腰の装身具である印籠などに身分や地位を表す側面が強かったようです。保守的といわれる女性の方が装身具においては革新的だったというのも面白いことだと思います。

近代・現代のジュエリー着用動機

露木●明治時代以降の近代の装身具着用の動機は、ちょっと複雑です。「金色夜叉」に登場するダイヤモンドのように、「富」や「社会的ステータス」を宝石によって象徴することはありました。また江戸時代以来の「おしゃれの表現として」装身具を身に付けるという着用動機もあったでしょう。しかし、明治時代から始まつた着用動機は？と問われればこんな言い方が正しいかどうか分かりませんが、あえて言えば「異文化、すなわち西洋文明へのあこがれ」というものがこれまでになかった着用動機ではないでしょうか。

着物でも付けられる指輪の大流行を始めとして、和装の装身具である帯留に使ったダイヤモンドを始めとする宝石の数々。これらはすべて西洋文明へのあこがれが根本にあったのだろうと推察しています。

西洋文明へのあこがれの例は本書でも紹介していますが、すでに近世初めのキリスト教導入期のロザリオなどに芽があったのですが、それが明治にな

ると一気に広がったのだと思います。桃沢●古代から近代までのジュエリーの着用動機についての露木さんの考えは分かりましたが、現代ではどうなっているのでしょうか？

露木●ちょっと長くなるかもしれませんが私なりに説明してみます。まず、戦後というちょっと前の時代から見ていくことにしましょう。

本の巻末の「年表」に書いておきましたが、終戦からたった1週間しかたっていないのに、もうネックレスや髪飾りを付けている女性が登場します（読売新聞）。まさに、女性の装飾欲恐るべしです。

戦後昭和30年代中頃まではアクセサリー時代です。戦前の「装身具」という言葉に代わって、洋風装身具を意味する言葉として「アクセサリー」という言葉がもてはやされました。安価な材料で作られたブローチ、イヤリング、ネックレスが登場し、女性たちの身を飾る欲求を満足させました。

「贅沢は敵だ」と言われ続けた戦時下から、「贅沢は素敵だ」への大転換です。「贅沢」といっても今日から見ればささやかなものだったのですが、当時の女性たちからすれば、こんな贅沢はなかったのだと思います。あえて言えば、平和な時代を謳歌する「心の贅沢」だったのです。これが戦後の装身具の原点です。

宝石や貴金属を使った「宝飾品の時代」は昭和35年、1960年前後から始まります。この時期は、ちょうど日本の高度経成長期と符合します。本格化するのは昭和39年の東京オリンピック以降ですが、始まりは昭和35年頃と見ていいでしょう。

たちまち人気沸騰し、マスコミも「宝石ブーム到来」などとはやし立てます。当時流行したのは「千本透かし」「あるいは「王冠透かし」と呼ばれる指輪で、宝石といつても合成石やサンゴ、アメシスト、メノンなどが中心でした。ダイヤは小粒石を使った角爪や月型甲丸程度

ですし、エメラルドやサファイアもまだです。真珠はもちろんありました、真珠は「輸出の王」（読売新聞）といわれる程の輸出の花形でほとんどアメリカなどに行ってしまい、国内で売られているものも外国人観光客用で、昭和36年当時に国内需要は全体の1%程度でした。やはり日本人には、まだ高値の花で手が出なかつたのでしょう。

おしゃれから財産価値へ

露木●この時代の宝飾品着用の動機がどのへんにあったかは、よく分からぬいところもあるのですが、少なくとも当初はおしゃれに目覚めた女性たちが、宝石の美しさに魅かれ、それを身に付ける喜びを感じていた時代のように思います。

ところが、その後すぐに宝石の財産価値という見方が出てきます。そうして宝石観が際立ってくるのは昭和39年の東京オリンピック前後からのことです。宝石の大衆化（とは言っても、今日のようにすべての人が買えるわけでもないのですが）が進む中で宝石本来の「美しさ」よりも「値が上がる」とか「財産保全」とかいう経済的視点で宝石を見る人が増えてきました。

そのような見方を助長したのは当時の時計・貴金属商や宝石評論家といわれる人たちです。

例えば、今の世代の人たちには忘れられているようですが、菅原通清という人がいました。政界の黒幕などともいわれた人ですが、この人の書いた「宝石天国ニッポン」（東洋経済新報社、昭和38年）などを読んでみると、「宝石は決して贅沢品ではない。貯金である。國の富である。宝石を持つことは“こと”ある時の保身術である。平常は楽しめて、しかも、わずかではあるが利殖にも通ずる」（まえがき）と主張しています。

こうした宝飾観・宝石観に対して、すでに昭和39年（1964年）に日本ジュエリーデザイナー協会を設立していた菱

田安彦氏は、山田禮子氏との共著「宝石の魅力」（教養文庫、昭和40年）の中で、「宝石は利殖だと、財産保全だとかいわれてましても、まともな人はすぐ飛びつくわけにはいかないでしょう。いわんや次の戦争に備えてなどというのはナンセンス」と反論し、宝飾・宝石の価値はその美しさにある、従ってデザインが大事と強く言っています。

しかし、多勢に無勢と申しまよるか、残念ながら菱田氏の主張は大きな声とはなりませんでした。宝飾・宝石財産觀はデビアス社の登場とその価格安定上昇策によって補完され、つい最近まで根強く続いてきましたのは、皆さんのご承知のとおりです。

自己表現としてのジュエリーの時代

桃沢●現在の着用動機はどうなっていると思いますか？

露木●現代は、「自己表現」、すなわち自分の好みや、個性、センスを表現する手段としてのジュエリーの時代です。その他の着用動機もあるでしょうが、自己表現がジュエリー着用の主要な動機といっていいでしょう。

しかし、すでに説明したように、身を装い飾る文化にはジュエリー以外にもいろいろあり、さらには個性やセンスを表現するモノやコトは多様化しています。ジュエリーは自己表現の手段というだけでは多くの人々をジュエリーに振り向かせることができなくなっています。

ジュエリーの存在感はいかにしたら高められるか。他の自己表現アイテムとは違う現代のジュエリーの存在理由とは何なのか。ジュエリーを作り売る側も、身に付けるユーザーも、そのへんが見えなくなっているのが現代の状況なのではないでしょうか。

簡単に答えが出来ることではありませんが、私はその答えのヒントが、はるか昔から続く、ジュエリーを含んだ日本の装身具の歴史の中にあるのではないかと思っています。